

[Report]

## A Study by Personal Experience Using Learning Cycle

Akiko Shimomura

Aino Gakuin College

### Abstract

The present study was carried out in order to evaluate the significance of the learning-cycle-process in experience learning with 9 students. The students filled out the self-evaluation list before and after the learning-cycle-process. Before the process four students were ranked below the mean. However, all the students recorded above the mean after learning-cycle-process. It is concluded that the process of learning-cycle in experience learning was significantly effective in self and mutual-understandings in personal relations.

**Key words :** learning cycle, experiential learning, self-understanding, mutual understanding

## 循環過程を用いた体験学習を試みて

下村明子\*

**【要旨】** 自己理解と、対人関係における相互理解が得られることを目的に、循環過程を用いた体験学習を9名の総合演習の受講生に実施した。客観的に自己を見つめることができるように、総合演習の前後に自己評価チェックリストを用いた。その結果、総合演習前には、4名の学生が大学生の平均値を下まわっていたが、総合演習後は、全員が平均値を上回った。その他、学生の反応から、今回の体験学習は、自己理解と人間関係における相互理解が得られるのに、効果的であったといえる。

キーワード：循環過程、体験学習、自己理解、相互理解

### はじめに

看護学生にとって最も困難なことは、自分とは人格、物の見方、考え方も異なる患者の要望に沿った看護ができるようになることである。それには、看護に必要な基本的な知識、技術、態度はもちろんのこと、人の話を聴いたり、人に話しかけるなどのコミュニケーションを通じて、相手の気持ちを理解することが必要である。

学生は臨地実習において、学内で学んだことすべてを用い、患者に個別的で適切な看護を提供することを学んでいる。しかし、多くの学生が行き詰まるのは、知識不足に加え、患者の立場に共感したり、患者を理解することが十分できないことである。患者に対する共感・理解ということは、単に知識を得ることに直接的にはつながらない。これら人間感情と関連する看護内容は、日々の生活習慣の体験を基盤に、時間をかけて成り立つものだといえる。

しかし、今の学生の置かれている一般的な個人的生活背景からみると、彼らが決して豊かな生活体験を得

ているとは言えず、人と人との相互関係についても不器用な者が多い。

そこで、今回の総合演習では、実習の効果を上げるため、対人関係における自己の感情の変化に気付き、その時の、その場の自己理解が得られられるような、成長を促す循環過程を用いた体験学習を実施した。その実施した内容について一定の効果が得られたので報告したい。

### 1. 体験学習について

体験学習は、戦後アメリカから移入されたが、系統的学習を重視する我が国では下火になった。その後、1976年の教育課程審議会で、主体的な学習習慣を涵養するため、体験学習の積極的な導入に多方面から関心が高まった。このような動向の背景には、子供の生活体験の貧困化があげられる。

看護を目指す学生も同様に、我が国における核家族化の進行とともに、年々生活体験が乏しくなっており、掃除、洗濯、炊事というごく基本的な生活習慣

\* 藍野学院短期大学

でさえも、母親や祖母等、家族まかせという者も少なくない。このように他人に依存している学生が、臨床の場において自分以外の人間である患者を理解し、患者の生活を整えていくことは並大抵のことではない。看護者として求められることは、自分とは価値観の異なった患者に対して、どれだけ深い関心を示すことができ、患者を受け止められるかということである。これが実践出来るためには、単に知識を一方向的に詰め込むのではなく、“人”との関わりの中で、多くの場면을体験することによって体得し、かつ、学んだことが様々な場面で自然に表現出来るようになることが必要である。

津村と山口(1998)は、学習が深められるように“体験学習の循環過程”という4つのステップを繰り返す方法を考案した。それは、それぞれの頭文字をとって【EIAHE】とよぶ。まず体験(Experience)で、自分の具体的な体験として、何かを試してみるのだとされる。次に指摘(Identify)で、これは体験の分かち合いをすることである。そこで何が起ったのか、そして起ったことについてのデータを集め、過程をみるのだとされている。そして、次の分析(Analyze)は、どのように、なぜ起ったかという体験の過程を考え、そしてデータに基づいて仮説化する(Hypothesize)。ここでは学んだこと、つまり、体験が教えてくれたことは何なのかを分析し、考察したことを基にして、自分なりの仮説をつくるのだと述べている。また、文献・資料などを活用して、次の機会にはどのような行動をとるべきか、文章化して、分からないことを明らかにしながら、4つのステップを踏んだ後、(E')のプランを立てて新しい行動を起こし、新しい体験学習のサイクルへ進み、この繰り返しが続いていくものとされる(図1)。体験学習においても

う1つ重要なことは、体験学習は生涯学習でもあり、学習者にとって、この学習が主体的で、かつ協働の学習であるということである。学習が効果的に促進されるためには、開かれた心、聴く耳、観る目を持って学ぶことであり、その結果新しい自分を発見し、成長していくことが期待される。理論と実践を統合すると、(1)問題解決(具体的な問題が解決できること)、(2)根拠性(物事の根拠が示されること)(3)社会実践的(現実の社会・文化と結びつくこと)、(4)展望拡大性(関連する社会が広がること)の4つの側面が達成されることになる。その結果、学生達にとって初めて、体験と理論との統合がはかられて、人間成長の変容につながっていくことが期待できる。

## 2. 研究方法

### 1) 対象と期間

看護短大生 20歳の女性(3年生)9名を対象とし1998年4月～1999年1月の総合演習を行った。

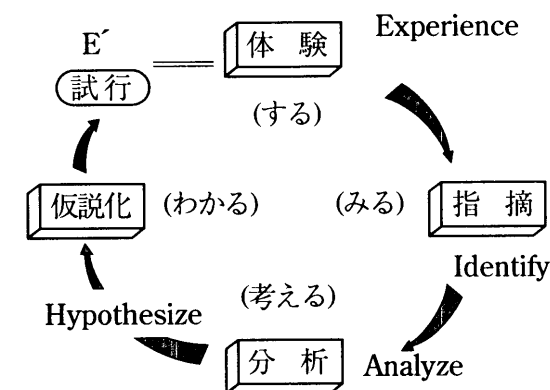
### 2) 体験学習の方法

① 学習・成長を促す循環過程を用いた体験学習プログラムを組んで実施した。終了後は、毎回一定の時間内(20分～30分)に、各自が用紙に、気づいたこと、なぜそう思ったのか、その理由を記録し、その後、その内容を発表し、さらにはグループメンバーの発表を聴き、それに対する意見、感想を自由に出し合った。

② 体験学習の初日と最終日に、自己の内面を知る目的で、全員に「自己評価チェックリスト」(川瀬正裕と松本真理子, 1998)(表1)と、最終日にアンケートを実施して、体験学習の前後の学生の変化を分析した。

今回企画した体験学習が、“自己を見つめる”事に対して効果的であったか、客観的に自己の内面を見つめられるように、「自己評価チェックリスト」を用いて総合演習の初日(H10年4月22日)と、総合演習最終日(12月16日)に実施した。時間の都合により他者評価は、総合演習の初日のみに自己の在り方をチェックした。自己評価チェックリストは同一のものを用いて、Iでは、自分の現在の状態を思い浮かべて、IIでは、自分の理想像を思い浮かべて、IIIでは、友達などから、ありのままの自分を推測して付けてもらうようにした。

集計方法は、① 質問項目の番号が奇数のものと偶



津村・山口(1998)

図1 体験学習の循環過程

表1 自己評価チェック・リストⅠ・Ⅱ・Ⅲ

	とてもそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	まったくそう思わない
* 1. 生まれかわれたら別の人間になりたい。					
2. 自分は人から頼りにされている。					
3. 自分には人よりすぐれたところがある。					
* 4. 人に批判されるとすぐに納得してしまう。					
* 5. 失敗すると自分のせいだと思う。					
* 6. 人からの評価が気になる。					
7. 自分は主体的に行動することができる。					
* 8. 人の目が気になってしまうことがある。					
* 9. 自分がイヤになることがある。					
10. 人からバカにされることが我慢できない。					
11. 自分に自信がある。					
* 12. 人の意見が気になって決断ができない。					
* 13. 自分には思い出したくない面がある。					
* 14. リーダー的役割は負担である。					
* 15. 他の人をうらやましく思うことがある。					
16. 人とうまくつきあえるほうである。					
17. 今の自分に満足している。					
18. 話の聞き手よりも話し手になるほうが多い。					
19. 自分は努力すれば向上することができる。					
20. 自分は人の役に立つことができる人間だと思う。					
* 21. 「このままではいけない」と思うことがある。					
* 22. 人から嫌われるのではないかと心配だ。					
23. 自分には個性があると思う。					
24. 人前に出ても平気でいられる。					

自己評価チェック・リストの結果

領域	現実自己評価	理想自己評価	他者からの評価
自己のあり方	(31.0)	(42.3)	
対人関係	(33.2)	(44.0)	
合計	(64.3)	(86.4)	

( ) 内は大学生の平均値

(川瀬・松本, 1998)

数のものとを別々に集計し、「とてもそう思う」は5点、「そう思う」は4点、以下3点、2点、「全くそう思わない」は、1点として集計する。ただし、\*印のついているものは逆転項目といって、得点の配分を「まったくそう思わない」5点から、「とてもそう思う」1点となるように逆に集計する。②①の作業を現実自己・理想自己・他者評価のそれぞれについて行う。③ 質問項目の番号が奇数のものの結果は自己のあり方、偶数のものは対人関係の領域に関連する項目である。それぞれ、自己評価チェックリストの下の表に結果を記入した。(大学生一般の平均は、チェックリストの結果の表の( )内に示している。それを基準に、自己の在り方、対人関係は±5の差、合計では±10の差を検討の目安とする)

### 3. 結 果

以上の方法によって行った調査の結果は、総合演習初日で、大学生の平均値(表1)チェックリストの結果は、初日より値が上昇した者(表2)は、理想自己評価の自己のあり方では、ABCEGHの6人(66.7%)で、下がった者はDFIの3人(33.3%)、理想自己評価の対人関係では、上昇した者はABCFHの6人(66.7%)、同じ者はGの1人(11.1%)、下がった者はDの2人(22.2%)であった。現実自己の自己の在り方では上昇した者はADFGHIの6人(66.7%)、同じ者はCの1人(11.1%)、下がった者はBEの2人(22.2%)であった。対人関係では、上昇した者はABCDEFGHIの8人(88.9%)で、下がった者はFの1人(11.1%)であった。一般大学生の平均を基準に自己のあり方、対人関係の差が±5、合計±10は検討するという点に関しては、実際の演習

時間内では、全体で検討する時間がなかったこともあるが、学生個々のプロセスが大切であり、単に「高い」「低い」ことだけが問題とはならないため実施していない。学生 B と C は体験学習前には、理想自己の自己のあり方が低く、大学生の平均との差が極端で B は 20.3, C は 14.3 であったが、体験学習後は値が高くなり、その差も B は 10.7, C は 5.7 に縮まっている。

次に、循環過程を用いた体験学習の結果を 1 例をあげて説明する。

身の回りの自然及び、その変化に対する気付きを高めるといふことと、スケッチという手段を用いて、自己の思いをどこまで相手に伝えられるかという目的で“My Tree”という体験学習を実施した。各自が、短大校内で、これだと思ふ“木”を決めてスケッチをする。その間 30 分、他の学生同士とは言葉を交わさず、描き終わった後、他の学生に自分の描いた“木”が分かるか、描いたものを見ながら話し合うという内容である。この場合、体験 (Experience) が、“木”を描くことで、30 分後、教室で自分の描いた“木”について話し合い、そこで何が起こったか指摘 (Identify) し、体験を分かち合った。例えば、木の特徴や周りの状況までも描けた学生が 7 名、2 名の学生は不十分な仕上がりであった。なぜそのようなになったのか分析 (Analyze) すると、7 名の学生は、30 分の与えられた時間を意識して、課題を達成することを優先したが、他の 2 名の学生は、時間内で絵を描くことよりも、ついその時の自然に浸って、描くことを楽しんでしまったと述べていた。また、自分の描いた絵が、言葉での説明をしないで相手の学生に理解してもらえるように、目印になるようなものまで描けた学生もおり、相手の立場を思いやる事が出来ていた。最後に、それらのことに基づいて仮説化 (Hypothesize) すると、自分の課題を優先して、相手のことまで考えて行動出来る学生は、自分の気持ちを抑えることができる。つまり、セルフコントロールが可能な学生と言うことになる。反対に、その時の課題よりも、自分の気持ちに正直に行動すると、時には決められた課題が遂行出来ないことも考えられる。つまり、セルフコントロールが低い傾向であるということが、今回の体験学習を通して実感できていた。以上のようなことを基に、次の機会には、学生は、自分の行動目的を明らかにして、何を優先していくべきかを考えて、セルフコントロール能力を高めていく必要性を学ぶことが出来ていた。その他の実施内容は、表 3 の通りである。

#### 4. 考 察

自己評価チェックリストの結果と学生の反応から、自己の在り方については、総合演習初日よりも終了日の方が、理想自己と現実自己の値の差が縮まった学生は 6 人おり、自己一致が進んだといえる。また、全体的に初日よりも終了日の方が値が上昇している学生が多かった。これについてはいろいろな要素が考えられるが、学生の反応にもあるように (表 2・3)、1 つは、自分に自信が持てなかった者が、臨床実習で、指導者に認めてもらえたことや、患者から喜んでもらえたことが自信につながったと述べている。そのベースにあるものが、体験学習での学びや気づきであり、それを実習に生かした事が反映していると思われる。これについては、津村・山口の研究の“体験学習での循環過程”という 4 つのステップを踏むことであった。つまり、体験学習で、メンバー間との心の交流の体験が、自分に何を教えてくれたのか、そのことの分析から、考察したことを基に仮説化し、今後の課題までを出来るだけ文章化して発表した。その結果、体験学習を通しての自己理解や、相互理解をするという目的は達成出来たといえる。1 例をあげて説明すると、無言の探索は、ノンバーバル・コミュニケーションを通じて、心のふれあい、お互いの信頼を深めたり、配慮したり、普段は気付いていない、一つひとつの感覚を味わう目的で実施した体験学習である。ここでの学生の反応は、目が見えない人の恐怖感や不安感、言葉を使わずにコミュニケーションを取ることの難しさは、ほぼ共通した反応であった。そして、階段やでこぼこ道を歩くとき、何らかの方法で相手に知らせるなどの細かい配慮、お互いの手のぬくもりが、恐怖感や不安感等をずいぶん和らげてくれることを感じていた。最初は自分に何を伝えてくれようとしているのかが分からず、いらいらしていたが、徐々に相手の気配りが分かるにつれて、相手に身を任せることができたこと。反対に、相手の気配りや思いやりを感じられたにもかかわらず、なかなか相手を信頼できず、自分の手でまわりを確認して初めて前に進むことができたこと。そして、普段は何気なく見過ごしている壁や窓、階段の手すり、ベンチの感触、木の葉や幹の感触等、新鮮な感じで体験学習を味わっていたようである。このように、同じことを体験しながらも、感じ方、考え方も人それぞれに違い、様々であったこと、さらに、自分の考え方の視野の狭さや偏り、自己中心的な言動に気付いていた。そのような体験学習の中から、自然に他者を受け入れられる

表2 自己評価チェックリストの結果と学生の反応

学生	領域	体験学習前				体験学習後			学生の反応
		理想自己	現実自己	理想現実の差	他者評価	理想自己	現実自己	理想現実の差	
A	自己の在り方	47	23	24	49	49	35	14	体験学習の前後を比較すると、他者からの評価を除いてすべて値が高くなっている。学生は、体験学習前は自分に自信がなかったが、体験学習を通して「自分をしっかり認めて、自分のペースで何事にも取り組むことが大切だということが分かった」と述べている。そして実習で頑張ったことを指導者や患者さんに認められることで、自分に自信が持てたことが数値の上昇につながったと振り返りをしている。
	対人関係	44	28	16		46	32	14	
B	自己の在り方	22	44	-22	28	53	41	12	ゼミ選択の理由は、自分に自信が持てるようにということであった。中学生時代の経験から人との関わりが持てなくなっていたが、今回の体験学習でそうなったことには自分に多くの原因があることに気付いた。自分勝手な決め付けで相手を見ていたり、背伸びして、その時の理想の自分からのズレを認められず自己防衛していた。演じている自分ではなく、自然な自分で人の身になって考えていきたいと述べている。
	対人関係	44	36	8		48	39	9	
C	自己の在り方	28	37	-9	37	48	37	11	自分の問題をどうしたら良いか分かりたくて今回のゼミを選んだ。消極的でなかなか自己主張ができなかったが、グループ学習を通して、日頃はメンバーまかせにしていた部分を、勇気をだして自分の意見を主張したら、メンバーが認めてくれたことで自信が持てた。そして、同じ課題を目標に取り組んだ事でも、考え方がそれぞれ違っていた事から、いろいろな考えがあることを実感したことで気付いている。
	対人関係	44	33	11		52	36	16	
D	自己の在り方	50	26	24	44	48	33	15	自分を知りたいという理由でこのゼミを選んだ。体験学習前は、現実の、今存在する自分が認められず過小評価していた。体験学習後は他人の話を、あの人はきっとこんな考えだと、以前のように決め付けた聴き方ではなかったと述べている。そしてグループワークを通して、考え方の異なる人がいてこそ目標達成も可能であり、自己を非難してくれる人が成長に欠かせない存在である事に気付いている。
	対人関係	45	28	17		44	35	9	
E	自己の在り方	36	44	-8	48	45	37	8	人との関わりを考えたくてこのゼミを選んだ。ゼミに参加して、日常生活の中の自分と、これほど深く向き合うことはなかった。このゼミにおいて、体験学習の後必ず「振り返り」の時間があり、それに取り組む中で、その時、その場で感じた自分の感情を深く意識することができた。と同時に、今まではなぜか湧き出る感情から裂けていたが、それがなぜか、今からないため、今後の自分の課題にしたいと述べている。
	対人関係	40	41	-1		42	45	-3	
F	自己の在り方	48	33	15	33	46	35	11	ゼミの選択理由は、自己を見つめるとはどういうことかを知りたかったからという。体験学習をすることで、自分を感じる事ができていった。それまでは、自分の欠点はいくらでも考えられ、自分が嫌いであるだけでなく、その嫌いな自分から目を逸らしていた。エンカウンターグループワークで、自分を曝け出す事が出来て、ありのままの自分を素直に認められたと述べている。
	対人関係	42	33	9		43	31	12	
G	自己の在り方	47	33	14	30	58	47	11	人との関わりが大切だと考え、関わっていく自分を知りたいと思いこのゼミを選んだ。自己評価チェックリストで、体験学習後はあまり差がなくなっていったのは、それなりに自分を受け止められていたことが実感できたことと述べている。特に実習での頑張りが、指導者や患者に認められ、「やった」という自分の大きな達成観、満足観に反映されたことによると述べている。
	対人関係	44	27	17		44	44	0	
H	自己の在り方	42	30	12	33	43	36	7	このゼミを選んだのは、自己表現が苦手であることと、自分に自信を持ちたいことが理由という。My treeで木の絵を描いたとき、なぜか自分は地面と根のない葉と枝だけの木を描いていることに気付いた。自分に自信が持てず、精神的に不安定だったことが反映されたように思うと述べている。その他無言の探索、ロールプレイでの共感、受容、傾聴等の学びは精神科実習で生かせたと述べている。
	対人関係	41	23	18		45	38	7	
I	自己の在り方	54	27	27	52	47	30	17	自分が好きになれず、変わるものなら変わりたいとこのゼミを選んだ。このゼミを通して客観的に見つめられるようになったことと、自分に不都合なことを人のせいにしてきた自分に気付いた。My-treeで学んだ観察ということが実習で生かせた。自分が患者とどういう思いで向き合うかによって、患者の表情、ほんの少しの目の動きの変化なども、見逃さずに観察出来ることを述べている。
	対人関係	54	40	14		51	41	10	

下村：循環過程を用いた体験学習

表3 体験学習の内容と学生の反応

体験学習の項目	目的	学習内容	学生の反応
・自己評価チェック	・現在の自己の有り方を見つめ、自己の課題に気付ける。	・自己評価チェックリスト(梶田・1988)を用いて、現在の自己を見つめてそれぞれ各自で気付いた事を発表した。	・全員が今回の“自己評価チェックリスト”を使うことが初めてだったが、客観的に自己を見つめられたと同時に“自己の振り返り”を時間をかけて行ったことと、グループ間で各自の気づきを発表してみて、共通点や違い、現実の自分をもっとしっかり見つめていく必要性をあげた学生が全員であった。
・My-Tree	・身のまわりの自然、及びその変化に対する気づきをたかめる。 ・スケッチという手段を用いて、自己の思いをどこまで伝えられるかを知る。	・各自が、大学校内で、これだと思ふ“木”を決めてスケッチをする。その間30分、他の学生同士とは言葉を交わさず、書き終わった後、他の学生に自分の画いた“木”が分かるか、画いたものを見ながら話し合う。	・与えられた30分間を意識して、木の特徴やまわりの状況までを画けた学生が7名、他の2名は絵そのものは不十分な仕上がりであった。振り返りの中で、課題を達成することが最優先して、その時、その場で感じて自分の気持ちを押さえて早く仕上げる事を最優先させた学生と、画くことを楽しんでいた学生がいた。また、自分の画いたものが少しでも分かってもらえるように、意識して画けた学生に対して、そこまで考えられなかった学生は、相手のことを思いやる気持ちがどれだけあるかによって、そこに表現される内容が違ってくことに気付いていた。
・無言の探索	・ノンバーバル・コミュニケーションを通じて、心ふれあい、お互いの信頼を深めたり、配慮したり、普段は気付いていない一つひとつの感覚を味わう。	・二人一組で、ひとりが目隠しをして、二人で無言の探索をし、様々なことを味わう。ひとりの探索時間は15～20分位で、後の振り返りの時間を20分間で行なう。	・この体験での学生の気づきは大変多くみられた。目が見えない人の恐怖感や不安感それに対して、細かい配慮が恐怖や不安をずいぶん和らげてくれること、相手の手のぬくもりが暖かく、勇気づけられたこと、最初は相手が何を伝えようとしているのか分らず、いつく自分に気付いたこと、相手の気配りが痛い程伝わってきたにもかかわらず、自分の手で確認してからでないと動けない自分がいて、なかなか人を信頼できない自分であることに気付いた。また、言葉を使わずに自分の思いを相手に伝えることの難しさや、普段は何気なく見過ごしている壁や窓、階段の手摺り、電話機、外のベンチ、植木の葉っぱの感触等新鮮な感じを味わえた。
・ロールプレイ	・臨地実習における、患者との関わりをプロセスコードに表し、その時の振り返を通して、自己の有り方を知る。	・臨地実習で患者やスタッフ、指導者等との関係がうまく図かれなかったケースを取り上げ、それぞれが役割交替をして、その時の気づきを振り返って発表する。	・ある学生が受け持った小児は、奇形の子供であった。いよいよその子の退院が決まった時、その母親が不安を表出してきた時の対応をロールプレイしてみた。最初は学生役を実施、その後で役割を交替して母親役を実施してみた。その結果、学生本人は、その時は母親の事を思いやって会話をしたつもりであったが、不安を受け止められる自信がなかったため、その話題から逃げようとはばかりしている自分かいたことに気付いた。他の学生も同様に実施してみて、母親役の時強い不安をなんとかしてほしいという気持ちになるが、学生役の時やはり母親の不安に何とか応えようという思いが先に立ち最初の学生同様に、受け止められないことがわかるので逃げようという気持ちになった。本当に相手の思いに共感したり、相手を受容することの難しさを実感したと全員が述べている。さらにこのことをきっかけに、受容・共感・傾聴とはをグループワークをして深められていた。
・エンカウンターグループカウ ンセリング	・その時の、その場の自己の変化に気付くことができる。 ・その時の、その場の相互関係に気づき相互理解が得られる。	・今、何か感じていたり、悩んでいることがある人は自由に発言して、それに対しての考えや意見を述べてもらう。	・ある学生が「真の友達とはどういう関係をいうのか、自分が求めている関係と、自分の友達が求めている関係が違うような気がする」という発言から、友達についての思いや考えを述べ合った。仲良しグループの中に所属しても、何か物足りていないと感じている学生の思いを聴きながら、それぞれに、友達に対する考え方の違いを知ったり、ただわいわいとその場を楽しく過ごすだけの相手ではなく、その友達が求めていることに応えられる関係も、友達として出来るようにしていくことの大切さを実感していた。そして、このような日常生活の積み重ねの体験学習が、患者理解につながっていくのではないかと気付けた学生もいた。
・グループワーク ・6つのストーリー ・輪くぐり ・NASA(月で遭遇したら?)	・課題達成のプロセスの中で、相互関係と相互理解の有り様に気付ける。	・それぞれの課題達成の時間内に、自由にグループ間で行動してもらい、その中で沸き起った感情を、振り返りの中で述べ合う。	・人任せな消極的な行動を取りやすい自分、あるいはグループ間を仕切っている自分、自分の考えをメンバーが認めてくれた時のうれしさと、反対に拒否された時の悔しさ、他のグループの進み具合ばかりが気になって集中出来ない自分だったこと等、平素認識していなかった新たな自分の有り様に気付けた学生がいた。

ように変化出来たといえる。そして何よりも、学生自身が“新たな自己理解”という目的意識を明確にして取り組んだ結果であることが大きいといえる。そして

自己理解が深まるにつれ、他者理解も深まったといえる。また、今回の総合演習を通して、教育として考えな

なければならない事は、一方的な知識の詰め込みではなく、“理論と実践の統合”を図っていくことの重要性和、それ以上に“学生との関わり方”の重要性が明らかになった。学生はどんな形であれ、自分が認められた時点で、自分に対して肯定的に変化している。Weiner (1996) は、自己実現の原理・先行条件を述べるにあたり、ロジャーズの考えを引用して、自己実現は他者との適切な相互作用および反応によって、促進されたり妨げられたりする。他者から十分に受け入れられると、人は自己を受容するようになり、調和が生まれ、それはまた自己実現につながっていく。と述べている。学生自らが自己実現に向かう関わり方や、学生の持てる力をどう引き出していくべきか、今回その必要性が示唆されたといえる。

### おわりに

以上、実習が効果的に展開するように、自己理解と、

対人関係における相互理解が得られることを目的に、総合演習を行った。その結果、学生の反応から、ある一定の効果が得られ、体験学習の重要性が明らかとなった。今後、益々生活体験が乏しく、自己コントロールの苦手な学生が増えることが予測される。教員は、学生自身の「心の実感」に触れ続け、実感からの発見や気づきによる、学生の自己実現につながる教育を目指して行くことが必要といえる。

今回、この報告をまとめるにあたり協力いただいた、ゼミの学生の皆さんに感謝いたします。

### 引用文献

- 川瀬正裕、松本真理子編：新自分さがしの心理学，ナカニシヤ出版，29，38～39（1998）  
津村俊充・山口真人編：人間関係トレーニング，ナカニシヤ出版，5，6～8（1998）  
Weiner, B. (林保・宮本美沙子 訳)：Human. Motivation, 金子書房, 303 (1996)